

教務だより

2014年8月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「自分を磨く」と遊びへの対処のしかた 茗溪塾塾長 宇野 雅春

忙しくしていると、つい忘れてしまうことがあります。それは「自分を磨く」ことです。読書や芸術に触れることも、「自分を磨く」ためのものかもしれません。最近の人たちは「すぐ効果が出る」と思われる方法に飛びつきがちです。たとえば「成績を上げる」ことについていえば、学校の成績を上げるのであれば「学校でやることだけをやればいい」とか、〇〇校に合格したいのであれば「その学校で出そうな問題だけを教えてほしい」ということです。

いつも目前の「緊急事態」に対して、応急処置ばかりしていて、成績が本当に伸びるのでしょうか。応急処置はその事態が去ればすぐ忘れられてしまうものです。成績が一時的に上がっても、すぐ元に戻るのおちです。私たちは子どもの成績を上げることが仕事ですから、その大変さはよくわかっているつもりです。何度も何度も繰り返し訓練して一時的に成績を取らせる学習訓練だけでは、本当に伸ばすのは難しいことです。なぜなら、成績が取れなかった生徒には取れない理由があり、学習の過程で根本的な理由を解決しなければ、本当の意味での安定した実力には、つながらないからです。その証拠に、いつも試験対策や検定試験対策ばかり熱心に行い、平常授業を休みがちな生徒で、成績が伸びた例を見たことがありません。

短期的な成果のために戦々恐々としている人ほど、いつも応急処置に追われているため、本質的な解決に至らないままになっていると思います。

つまり、「自分を磨く」ということは、短期的な目的達成のための速成プログラムではなく、もっと根本に立ち返って粘り強い学習をすることです。夏休みは、時間があるという意味では、「自分を磨く」チャンスです。ただ学校の宿題に追われるような応急処置だけの夏休みに終始しないよう計画を立ててほしいものです。

そこでは学習する日と遊ぶ日を明確に分けることが重要です。学習する日は一日中勉強し、中途半端に娯楽を入れない方が頑張れます。娯楽を少しでも入れてしまうと、勉強が重く感じられます。夏期講習や合宿などの集中学習ほど学習を楽しく感じるのは、あれこれ余計なことをやる暇や考える暇がないからこそ感じられる「学習の喜び」といえます。

遊ぶ日は遊び、学習するときは学習に専念することで、はじめて学習のリズムが生まれます。成績の上がる生徒のほとんどは、そうした学習方法に目覚めています。はじめというのは気持ちの切り替えです。発想としては、受験生は受験に向けての学習を積むことで「自分を磨く」ことができるという考え方を持つことです。成績を上げたいのならば、ひとつひとつの学習課題を完全にこなしましょう。自分のレベルを超えることができない人は、「あれがよくない。これがよくない。」と、自分ができないことに言い訳をしているように思います。

「わかったということは、変わるということ」。今までの自分では気がつかなかったことが見えてきたら、それが「成長する」ことだと思います。「自分を磨く」夏休みを送ってほしいと思います。
(「合格への道しるべ」より)